

## 資料調査 : 『Shanghai Jewish Chronicle』の「週間医学ニュース」

阿部, 吉雄  
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門 : 教授 : 国際共生学

<https://doi.org/10.15017/25671>

---

出版情報 : 言語文化論究. 29, pp.181-189, 2012-10-24. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン :  
権利関係 :

## 資料調査： 『Shanghai Jewish Chronicle』の「週間医学ニュース」

阿 部 吉 雄

### 初めに

第2次世界大戦を含む約13年間（1938～1951年）、中国上海に中欧・東欧系ユダヤ人の難民社会が存在した。彼らは1938年3月のナチスドイツによるオーストリア併合から1941年6月の独ソ戦開始に至る時期に、ナチスによる迫害やドイツ軍の侵攻に追われ、当初入国ビザが不要だった上海租界に逃れた約1万7000人のユダヤ人である。

これらの人々はドイツ、オーストリア、チェコスロバキア、ポーランド等の出身者であるが、言語、文化、習慣、社会制度などがヨーロッパとまったく異なる上海での生活に順応するのは容易でなかった。気候風土や衛生環境の違いによる健康面の問題も脅威のひとつだった。上海の夏は摂氏40度近くになり、湿度も高い。これに貧弱な衛生条件が加わり、ユダヤ人難民たちが故国で経験したことのない赤痢、腸チフス、マラリアなどが次々に流行した。寒い湿った冬もインフルエンザや呼吸器系の疾病をもたらした。大量に発生する蚊に対しては難民たちが生まれて初めて見る蚊取り線香が、ハエにはハエ取り紙が使われた。ねずみ退治にどこの家でも猫を飼った。しかし最も貧しい難民たち約2500人を収容するために支援委員会が数ヶ所設置した「ハイム」においては、石鹸の不足や清潔な下着を調達できなかったことと、混雑した住環境のためシラミに汚染されることは避けられなかった。

### 上海のユダヤ人難民医師

ユダヤ人難民の中には200人以上の医師、180人の歯科医、120人の看護師がいた。医師に関しては、OECDの調査による2007年の日本の人口1000人当たりの（医療従事している）医師数2.1人の約5.6倍である。看護師も2007年の日本の人口1000人当たり9.4人に比較しうる7.1人である。<sup>注1</sup> これらの医師や看護師が上海在住ユダヤ人による支援委員会<sup>注2</sup>や難民コミュニティの自治組織と協力し、脆弱な状態にある難民社会が直面する様々な危機に対応した。

難民医師たちはヨーロッパでほとんど扱ったことのない様々な病気に関する知識と経験を共有するため、1939年に「移住者医師連合」(Vereinigung der Emigranten-Aerzte)を設立した。この組織は会報と医学雑誌を出版したが、数回の会合の後に消滅してしまった。1940年にはユダヤ人難民の多くが居住した虹口地区の難民医師だけからなる「虹口医師協会」(Hongkewer Aerzte Verrein)が設立され、毎月2回専門的な討論会を行うなど、その後ずっと活動を続けた。この組織の下で医学雑誌『Journal of the Association of Central European Doctors』(後に『Shanghai Medical Journal』に改称)が発行されたが、財政上の理由から1942年末に停止した。<sup>注3</sup> この他にも1940年10月から1941年3月

までのわずか6号で終わったが、医学雑誌『Medizinische Monatshefte Shanghai』（上海医学月刊）が発行された。<sup>注4</sup> また医師たちは、上海のラジオ局 XHMA でユダヤ人難民の Horst Levin が担当していた番組で、健康と衛生について啓発活動を行った。<sup>注5</sup>

### Shanghai Jewish Chronicle の「週間医学ニュース」

『Shanghai Jewish Chronicle』はユダヤ人難民の Ossi Lewin と Ferdinand Kasstan が1939年5月5日に週刊新聞としてスタートさせた。上海のユダヤ人難民が発行したドイツ語による日刊（朝刊、夕刊）、週刊、月刊新聞は約10紙に上るが、『Shanghai Jewish Chronicle』は最も初期に発行が始まった新聞のひとつである。また、1941年12月に太平洋戦争が始まり、上海が日本の支配下に入って多くの難民新聞が廃刊された中で、『Shanghai Jewish Chronicle』は存続が許されたため、上海のユダヤ人難民社会におけるその重要性はさらに高まった。

1941年半ばから1942年後半にかけて『Shanghai Jewish Chronicle』に「Medizinische Wochenschau / Medical Weekly Review」（週間医学ニュース）という記事が定期的に掲載された。記事の監修者として医師 Kurt Wolff 医学博士の名が挙げられており、「週間医学ニュース」の実質的な責任者と見られる。彼は、1943年5月以降中欧・東欧系ユダヤ人難民が居住するよう指定された虹口・揚樹浦地区を管轄する提籃橋分局特高股が1944年8月に作成した『外人名簿』では「37歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。『Shanghai Jewish Chronicle』の1942年6月3日号で Wolff は、「週間医学ニュース」の課題が「上海での生活のために有用な医学と衛生の知識を伝えること」であり、その目的は「移住者がより容易に慣れることができ、彼らに多くの苦悩が降りかからないようにするため」としている。

現在、ドイツ国立図書館が進めているプロジェクト「Projekt “Exilpresse digital. Deutsche Exilzeitschriften 1933-1945”」（亡命新聞・雑誌のデジタル化。1933～1945年のドイツ語による亡命定期刊行物）により、『Shanghai Jewish Chronicle』の現存する版を閲覧することができる。それによると、1941年6月17日～1942年10月28日の間に発行された下記の13回分の『Shanghai Jewish Chronicle』に「週間医学ニュース」が認められる。

1941年6月17日（火）号／1941年7月8日（火）号／1941年10月14日（火）号／1941年10月28日（火）号／1941年11月16日（日）号／1941年12月29日（月）号／1942年1月12日（月）号／1942年1月26日（月）号／1942年4月15日（水）号／1942年5月27日（水）号／1942年6月3日（水）号／1942年7月8日（水）号／1942年10月28日（水）号。

これらの「週間医学ニュース」が掲載された号は、それが印刷されたページ（と裏のページ）だけが残っていることから、おそらく医学に興味のある個人がこの記事ゆえに保管していたものであろう。また、各記事には「第〇回」といった通し番号が付されていないため、この企画がいつ始まり、いつ終わったのかは不明だが、1942年6月3日号で「週間医学ニュースが1周年を迎える」という記述があることから、1941年の6月上旬に始まり、1942年末に終了したと思われる。「週刊ニュース（Wochenschau / Weekly Review）」という名称であり、発行日が互いに近い記事が掲載された曜日が同じであることから、原則的には週に1回のペースで掲載されたと推測される。1回の分量は1ページの3分の1～3分の2を占める。以下では各回の記事の内容について、上海のユダヤ人難民の状況を知るといふ観点から簡単に紹介する。

○1941年6月17日号、第5面。医師 Kurt Wolff 医学博士、「チフスとパラチフスについて知っておく

べきこと」。医師 G. Markovits 医学博士、「熱帯病について。続き」。

筆者の Kurt Wolff はチフスについて、「上海でよく発生する伝染病であり、時には流行することもある」とし、「非衛生的なトイレ環境や汚染したシーツ等を通して、人から人へ移ることもある」と指摘しており、難民たちの健康にとって上海の貧弱な衛生設備が脅威の原因になっていることが分かる。Wolff はさらにチフスの症状や病気の進行形態について説明し、「最初の週にチフスと認めることは不可能であるかも知れず、インフルエンザや血液中毒（敗血症）と取り違えることもあり得る。ようやく2週目の中頃に、発疹から、また特別な血液検査に基づいて確信を持って診断することが可能になる」と、難民医師たちにとって診断の際に困難をもたらす病気であることを強調している。また上海では毎年予防接種が行われていると記している。<sup>注6</sup>

もう一人の筆者の G. Markovits は「熱帯病について。続き」において、結核やジフテリアは痰やほこりにより、チフス、コレラ、赤痢は水や食料が排泄物で汚染されることにより感染すると説明する。<sup>注7</sup> Markovits は蚊やシラミやトコジラミのような吸血性の昆虫が病人から健康な人に病原菌を移すとも述べており、これらの虫は難民たちの生活を不快なものにするだけでなく、彼らの健康にとっても有害だった。マラリアの予防策として、第一に蚊の駆除とその孵卵場の除去、次に蚊帳による防護を勧めている。また最後に「最終回へ続く」とあり、3回に渡って紹介していることが分かる。

○1941年7月8日号、第4面。医師 Hans Salomonsky 医学博士、「気候に関する考察」。

筆者の Hans Salomonsky は『外人名簿』では「49歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。上海のユダヤ人難民たちはヨーロッパとまったく異なる気候の下に置かれることになった。Salomonsky は上海の高温多湿の気候の影響として、まず汗による水分排出の増加を挙げ、難民たちが最初の夏（1939年）に最大20～30ポンドの体重減少を経験したと述べている。「医師による適切な観察下であれば、上海は肥満症者にとって理想的な保養地とみなすことができよう」と言うのはユダヤ流ジョークだが、次に上海の気候による血圧の低下を挙げ、「当地の気候が（高血圧の人や）糖尿病患者にとって、よい効果があるようだと言うことができる」としているのは、厳しい現実も客観的に捉え、そのプラス面を見出して生きる意欲を得るユダヤ人の知恵と言えよう。さらに、高温多湿の気候ではビタミンの消費量が増加する結果として、脚気、壊血病、ペラグラ、くる病、重度の貧血等のいわゆるビタミン欠乏症の発生だけでなく、春の倦怠感、リウマチ、神経痛等の変調も挙げている。そしてあらゆる種類の感染に対する体の抵抗力の低下もビタミンの不足ゆえとし、特に肝臓や腎臓にビタミンを備蓄できない幼児の場合は非常に重大な問題だと警告する。知的事柄への関心の低下や憂うつやその他の精神的障害も「長期間高温多湿の気候にさらされることによって助長されるようだ」と推測している。

○1941年10月14日号、第6面。医師 Fritz Boehm 医学博士、「上海での皮膚病について」。

筆者の Fritz Boehm は、1939年11月に上海の The New Star Company という出版社から発行された『Emigranten Adressbuch』（移住者住所録）では「医師、ベルリン出身」と、『外人名簿』では「50歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。Boehm は上海の高温多湿ゆえの大量の汗による皮膚病を論じる。汗自体が皮膚の炎症を引き起こす可能性があること、刺激された皮膚は特に真菌症にかかりやすく、上海の悪い衛生状態では容易に移ること、虫刺され、殺虫剤、木材のほこり、にかわと潤滑油、毛皮の着色料などが皮膚の炎症を引き起こすことを紹介する。これらの危険から皮膚を守るために、Boehm は日焼け予防を十分に行った上で、肌を空気と日光にさらすことを勧める。そ

のためには「健康な肌を定期的に洗ったり、入浴したりすることが重要であり、洗った後は肌を入念に乾かさねばならない」とするが、ユダヤ人難民たちが賃借した下層階級向けの住宅にはシャワーやバスの施設がなかった。また「絶えず圧迫されている箇所の肌は病気になるやすいゆえ、ベルトやブラジャーやヘルニアバンドの下の肌には定期的にパウダーを付けることが望ましい」と言う。ウォッシュ・オーデコロンまたは他のアルコール性溶液の適度な使用はよいが、石鹸や香料入りの水の中には問題がある商品もあることを明らかにしている。肌を覆う下着については、汗をよく吸収するか、汗が蒸発しやすいことが大切で、上海の気候において絹や人絹を夏に肌に直接触れる下着に用いるのはまったく不適當であり、着色された下着による激しい皮膚の炎症がすでに確認されていることから、「店から買ってきた下着は、真菌症の感染を避けるために、初めて使用する前に洗う」よう助言している。さらに、皮膚は個人差があるので、炎症になった際には医師にのみ相談し、友人や知人、薬剤師、新聞や映画による薬の宣伝に頼るべきではないと戒めている。医師の診察を受けず、市販の薬を利用する人が多かったのであろうか。

○1941年10月28日号、第6面。医師 Theodor Friedrichs 医学博士、「ある医師の考え」。

筆者の Theodor Friedrichs は『移住者住所録』では「医師、ベルリン出身」と、『外人名簿』では「50歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。この記事は特に具体的な病気や治療については触れず、医学の歴史において有能かつ犠牲的精神を持つ医師たちが画期的な治療法を發明してきたことを述べた後、Sine（信誼）という製薬会社の Vitaspermin という薬を紹介している。Friedrichs によれば、「この薬は記憶力を改善し、知的創造力と体調全般を高め、体力を向上させ、性欲虚弱と性的な神経障害を解消する。これは青少年でも、中年でも、要するに腺の故障や内分泌、特に生殖腺と関連する一年齢または病気による一すべての苦痛を解消する」とのことである。そしてこの記事の下には、ページの約2割のスペースを使った Vitaspermin の宣伝が他の広告と並んで見られる。その文面は「Vita-Spermin。注射または錠剤で。男性にも女性にも効くと実証されたホルモン-ビタミン剤。性欲減退、早すぎる老化、神経衰弱、更年期に。有限会社 Sine 製薬製造」というものである。

○1941年11月16日号、第6面。医師 Kurt Wolff 医学博士、「医学の世界から。誰でも知っておく価値があるもの。熱帯の気候における神経障害／アモク（急性精神錯乱）とは何か／個人心理学とは何か」。

著者の Wolff は、熱帯病に関する Sir Philip H. Manson の知見が上海にいるユダヤ人難民にも当てはまるとして紹介する。高温多湿の気候では特に神経障害になりやすく、集中力の不足と全般的な無関心（マラリア）、消化に関する神経過剰（赤痢）、特に夏季の不眠症をもたらす。男性においては強度の神経過敏と憂うつ、女性においては生理不順、月経中の大量の出血と相当な痛み、著しい不安と神経衰弱、頻繁な動悸、興奮と神経過敏、血圧の変動、血管および筋肉の痙攣、上海でしばしば見られる狭心症も気候のせいとしている。

Wolff は盲目的な激怒の発作中に会った他人を殺すアモク（急性精神錯乱）がこの年の夏、上海で散見されると報告している。これはマレー半島のような熱帯性気候が条件となり、土着民の間に現れる精神病であるとし、ユダヤ人難民には無縁であると言っているように理解できる。

Wolff はさらにウィーンの子科医・心理学者 Alfred Adler の劣等感に関する見解を紹介し、患者が新しい生活状況に適應できない際の「Adler 博士の治療の本質は、病気の本当の原因の分析と患者への意識化だけでなく、優しい話しかけや説得により、患者が共同体に復帰し、社会的関係にお



いて社会の有用な一員になるよう暗示的に働きかけることにもある」とし、子どもを含めてユダヤ人難民たちが故郷と異なる環境において精神的な困難を抱えていたことが伺われる。<sup>注8</sup>

○1941年12月29日号、第5面。弁護士 Siegfried Neumann 博士、「妊娠中絶と中国の法律」。

筆者の Siegfried Neumann は『移住者住所録』では「弁護士、ベルリン出身」と、『外人名簿』では「49歳、弁護士、ドイツ難民」と記載されている。Neumann は、中国では妊婦が妊娠中絶を行ったり、してもらったりした場合、最高6ヶ月の懲役刑または禁固刑または最高100ドルの罰金刑が科せられると紹介する。しかし妊婦が主観的に自分の命を救うためにそうしたのであれば、たとえこの生命の危険が客観的におそらくは全く存在していなくても、彼女は罰せられない。他方、中絶を施す医師については、それが客観的に妊婦の命を救うために必要な場合にのみ、法的に許される。(妊婦の生命の危険がないにもかかわらず) その希望もしくは同意に基づいて中絶を行った場合は最高2年の禁固刑；中絶処置によって妊婦が死亡した場合は最低6ヶ月の懲役刑；また利益目的で中絶処置をした場合も最低6ヶ月の懲役刑であるが、それによって母親が死亡した場合は3年の懲役刑；体の重い障害、例えば出産能力の喪失が起こった場合は最低1年の懲役刑；これらすべての場合において、さらに最高500ドルの罰金刑が科せられる可能性があると説明する。上海で難民たちが置かれた厳しい経済状況下において子どもを産み育てることは難しかった。医師の Samuel Didner は、自分が週に平均2回中絶を行い、また約20人の母親たちが食料を買うため自分の新生児を売りさえしたと証言している。<sup>注9</sup>

○1942年1月12日号、第3面。医師 Edmund Kapise、「一酸化炭素中毒への注意」。

筆者の Edmund Kapise は『外人名簿』では「45歳、医師、オーストリア難民」と記載されている。保存されている「週間医学ニュース」の著者で唯一「M. D.」（医学博士）の表記が付されていない。上海では寒くなるとともに一酸化炭素中毒が増え、特に太平洋戦争が始まったこの年の冬はセントラルヒーティングが止められた家屋で石炭ストーブを新設することが多く、専門知識を持たない者による設置、それによる排気管の不十分な密閉と内径、ストーブの不適切な着火等の理由から危険であった。Kapise はまず一酸化炭素中毒の症状を紹介し、次に事故が起きた際の応急手当として、窓を開け放つか叩き壊すこと、患者をその場所から遠ざけること、皮膚の摩擦、人工呼吸を挙げる。しかし予防が最善であると言い、専門家によるストーブの設置と頻繁な検査、正確な説明書の入手、暖房する部屋の（特に夜の）頻繁な換気、夜の着火を避けることを勧めている。

○1942年1月26日号、第3面。医師 A. Loewenstamm 医学博士、「結核の予防」。

筆者の A. Loewenstamm は『外人名簿』では「Arthur Loewenstamm、45歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。上海の結核患者は最低5万人以上と推定され、この時期数週間に渡って上海結核予防協会による結核予防の大キャンペーンが行われていた。Loewenstamm は結核の発症メカニズムを詳細に説明した上で、その防御法として咳で結核菌を吐き出す患者の病院や療養所への隔離を挙げる。しかし上海では必要なベッド数の約3分の1が不足しており、それが年間の死者数に等しいと言う。また、多くの患者は十分な期間、施設に滞在しようとしめない。その場合に患者の家族を結核の感染から守る方法として、1) (菌を食べ物に移さないよう) 病人の周囲のハエを可能な限り根絶する、2) 特に子どもたちは病人から遠ざける、3) 病人の下着は洗濯の前に消毒する、4) ほこりが舞い上がらないように床は常に濡れ雑巾でふき掃除する、5) 子どもを床の上を這わせない、6) 住居はきちんと換気を行う、患者の部屋に風と日光を入れる等の対策を示している。初期

の結核は治すのが簡単であるゆえ、咳、痰、刺すような胸や背中への痛み、発熱、呼吸困難、食欲不振等が比較的長期間続く場合は、早めに医師の診察を受けるよう勧めている。そして、「何らかの疑わしい兆候の際に早めに医師の診察を受ける人は、自らと周囲の人々を大きな危害から守ることができ、この悪性の病気の蔓延を制御することに貢献するのである」と、人々の公共意識にも訴えている。

○1942年4月15日号、第4面。医師 Kurt Wolff 医学博士、「壊血病」。

この記事のみ「監修、医師 Kurt Wolff 医学博士」の表記がない。筆者の Wolff は壊血病を「上海において春と秋に頻繁に見られ、移住者（ユダヤ人難民）の間でもはや珍しくないビタミン欠乏症」と紹介する。その兆候として仕事への無気力、疲労、全般的な虚弱、血色のなさ、うつ状態、体重減少を挙げ、それでも多くの患者は医師に相談せず、突然鼻や口からの出血、または皮下出血、特に下肢の皮下出血等の症状が起きてから、驚いて医師の診察を受けるとしている。上海においては、1) 伝染病を避けるため、野菜を湯通ししたり熱で調理したりすることが必要であり、2) 生の牛乳はチフスに感染する恐れがあるため禁止食物に含まれ、3) オレンジやレモンは大抵の移住者にとって手が出ないほど高価になったため、特に春に壊血病にかかる可能性が非常に身近になっていると言う。Wolff は壊血病のさらなる蔓延を防ぐため、適切な栄養摂取およびビタミンCとカルシウムを含む薬の使用を医師が助言するよう説いている。<sup>註10</sup>

○1942年5月27日号、第4面。医師 Alfred Opper 医学博士、「アメーバ赤痢」。

筆者の Alfred Opper は『移住者住所録』では「ウィーン出身、医師・理学療法士」と記載されている。Opper はアメーバ赤痢について非常に詳しく論述するとともに、「上海では一般にアメーバ赤痢の方が細菌赤痢よりもずっと広まっており、主に熱帯的季節、つまり6月から8月に発生する」と紹介する。患者は暗赤紫色の下痢の他はしばしば特別な痛みを感じず、発熱、嘔吐、痙攣もないため、夏季のあらゆる下痢は経験のある医師による便の検査を勧めている。治療を受けないことは患者自身にとって危険であるだけでなく、十分に消毒されていない手で食事の準備をするとさらなる感染につながるからである。それゆえ厨房で働くスタッフ全員の検査、またハエも病原菌を媒介するため、食事をハエから遠ざけることが必要としている。アメーバ赤痢の薬としてエメチンとヤトレン（の日本製の代用品）を挙げている。

○1942年6月3日号、第4面。医師 Kurt Wolff 医学博士、「マラリア」。

Wolff は3種類のマラリア（3日熱マラリア、4日熱マラリア、熱帯熱マラリア）の発症メカニズム、初期の兆候（疲労、頭痛、手足の痛み、背中を冷たい水が流れる感覚、吐き気）と発病後の症状（悪寒・高熱・発汗の波、貧血、黒水熱。栄養不足と過大な疲労によって弱った体調の場合、病状が重くなりやすいつとしている）を紹介した後、中国ではアテプリンとプラスモキンという薬が利用できるが、その選択や服用量、投与期間は個人によって大きく異なるため、経験ある医師の治療を受けるよう勧めている。予防策は寄生虫を媒介するハマダラカ（蚊）の駆除であり、上海では毎春保健所によって孵化場所である湿地と貯留水の乾燥と消毒が行われていると言う。ユダヤ人難民に対しては、感染の危険を避けるため、上海および時折遠足で出かける郊外のそのような湿地に近づかないことと、かつてマラリアに感染したことがあるか、そもそも熱帯や亜熱帯の湿地帯に行ったことがある人は、予防のためにキニーネの錠剤を自分に合った間隔で服用することを勧めている。

○1942年7月8日号、第4面。医師 Th. Frischauer 医学博士、「医学における蛇と蛇の毒（上海爬虫類学協会より）」。

著者の Th. Frischauer は『移住者住所録』では「Theodor Frischauer、ウィーン出身、歯科医」と、『外人名簿』では「55歳、歯科医、ドイツ難民」と記載されている。Frischauer は蛇の毒には鎮痛の効果があり、リウマチ、坐骨神経痛、神経痛で通常の治療の効果がない場合に、蛇の毒から作った薬剤（軟膏や注射）によって完全に治癒したり大幅に改善したりする例があることを紹介している。また、モルヒネのような一般的に使用される鎮痛剤と違い、蛇の毒による薬剤は鎮痛効果だけでなく、病気の改善や体力強化の作用があると主張している。精神的な苦痛に対しても蛇の毒による薬剤は効果があり、上海のユダヤ人難民によく知られている憂うつな気分、億劫さ、劣等感を取り除き、さらには神経衰弱、ヒステリー、更年期の女性の神経症の症状等にも使用できるとしている。上海の周辺で見られる唯一の毒蛇「アメリカマムシ」の毒は、ヨーロッパで蛇の毒の薬剤の生産に利用される毒の種類よりもずっと強くて好都合な組成を持ち、その中に効力のあるあらゆる成分を含んでおり、Frischauer が所属する上海爬虫類学協会がその研究を行っている。

○1942年10月28日号、第4面。医師 J. T. Loewy 医学博士、「回虫」。

著者の J. T. Loewy は『移住者住所録』では「Tibor Loewy、医師、ブダペスト出身」と記載されている。Loewy の経験によれば、上海の住民の3人に1人が寄生虫である回虫を持っており、中国人住民だけに限ればさらに高い割合になると推測する。これほどの広がりがあるにもかかわらず、回虫の生態についてユダヤ人難民は理解しておらず、移住者病院<sup>註11</sup>に入院していた女性は自分が食べたりんごの中に回虫の幼虫が入っていたと考え、別の女性患者は回虫がキスによって伝染すると信じていたと言う。回虫の卵は糞便とともに体外へ出るが、上海では畑に肥料として人糞がまかれるため、この地面に触れたり、土がまだ付いている野菜を食べたりするだけで、感染が引き起こされる。すべての野菜を徹底的に洗わねばならないが、地面に接触する大根、レタス、ほうれん草、ピーマン、豆、トマト、キュウリ、およびりんご、なし、桃等のくだものには特に危険が潜んでいる。過マンガン酸カリウムの使用や熱湯による煮沸だけでは感染の予防としてまだ不十分であり、土は流水によって念入りに取り除き、さらに手をよく洗うよう求めている。回虫の兆候として不快感、頭痛、食欲不振、吐き気、体重減少、激しい空腹、鼻のかゆみ等が挙げられる。便の中に回虫が発見された場合は、医師の指示による寄生虫駆除治療を行うことを勧めている。その方法としてサントニンまたはケノボジ油（いずれも強毒であるため、医師の処方が必要）と下剤の併用を挙げている。

## 終わりに

「週間医学ニュース」の記述から、上海の高温多湿の気候によりユダヤ人難民たちが様々な病気にかかる危険にさらされていたこと、そして貧弱な衛生状況と特にハイムにおける混み合った生活環境、食料不足による栄養状態の悪化という悪条件が脅威をさらに大きくしていたことが明らかになった。この脅威は多くの病人の発生と死亡率の上昇をもたらしただけでなく、うつ状態や無気力に代表される精神面の変調にも現れていたようである。記事の中で医師たちは病院での診察を勧めている。熱帯病に関する難民たちの無知や油断が、難民社会全体に病気を広めることへの医師たちの危機感が大きかったことが伺われる。



## 注

1. 医師、看護師、歯科医、その他の医療関係者に関する統計については、拙稿「資料調査：上海のユダヤ人難民社会の医師」、『言語文化論究』（24）2010年、九州大学大学院言語文化研究院、169～174頁。
2. ユダヤ人難民が上海に到着し始めた1938年8月、「ヨーロッパ系難民救援国際委員会」（International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC）が設立された。1938年10月にできた「上海ヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会」（Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai / CFA）が1939年8月、それまでICが行ってきた病院と救急診療所の組織と運営を引き継いだが、1939年12月 Sir Victor Sassoon を委員長とする「在中国ヨーロッパ系移住者支援国際委員会」（International Committee for European Immigrants in China / IC）が新たなICとして誕生した。
3. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (<sup>1</sup>1976). S. 302 u. 307. Rena Krasono: „Strangers Always. A Jewish Family in Wartime Shanghai“. Berkeley, California (Pacific View Press) 1992. S. 192.
4. Felix Grünberger: „Soziologisch-psychologische Studie über die Flüchtlinge in Hongkew (1948)“. In „Zwischenwelt“. (18) 2001. S. 24. Rena Krasono: „Strangers Always. A Jewish Family in Wartime Shanghai“. S. 193.
5. James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. New York (The Free Press) 1994. S. 84.
6. 1942年の春から夏にかけて、栄養失調で弱っていた数百人の難民がチフスに感染し、移住者病院は患者で一杯になった。丸山直起：『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』、2005年、法政大学出版局、179頁。
7. 上海を流れる黄浦江はバクテリアや寄生虫に満ちていた。難民たちは沸騰させた水を飲んだり、果物や野菜は洗って調理したものを食べたりするよう指導されていたにもかかわらず、赤痢で数百人が死亡した。1939年6月には5人の難民が病院に運ばれ、ひどい腹痛と下痢が2週間続いた。安静と脱水症状を避けるための食塩水の注射以外に治療法がなく、7月にはさらに33人の患者が出て、2人が死亡した。James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. S. 67.
8. とりわけ、ヨーロッパで一生をかけて築いてきたものをすべて失った年配の難民で、上海に家族がいない人々は自分のことに気を使う意思を失い、徐々に衰弱していった。1939年9月のドイツのポーランド侵攻により世界大戦へと突き進むヨーロッパの状況は、上海での滞在が短期間で終わるといふ難民たちの希望を打ち砕いた。James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. S. 72.
9. James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. S. 73 u. 174. 以下は1939～1946年の年別の新生児数である。1939年2人、1940年67人、1941年64人、1942年36人、1943年37人、1944年48人、1945年50人、1946年114人。太平洋戦争中の4年間（1942年～1945年）はその前後の時期に比べて新生児数が少なくなっており、戦争による上海の経済状態悪化の影響が見られる。Siegfried Englert: „Sechs dürfen unter einem Gebetsschal beten. Zur Geschichte der Juden in Shanghai 1937-1945“. In „Shanghai. Stadt über dem Meer“. Hrsg. v. Folker Reichert / Siegfried

Englert. Heidelberg 1996. S. 121 f.

10. 1941年12月に太平洋戦争が始まると、アメリカ・ユダヤ人合同配分委員会（ジョイント、JDC）を始めとする海外のユダヤ人組織からの支援が停止し、難民の栄養状態は悪化した。貧血症、脚気などのビタミン欠乏症などが広がり、1942年の死亡率は前年の2倍になった。Felix Gruenberger: ‚The Jewish Refugees in Shanghai‘. In „Jewish Social Studies“. (12) 1950. S. 338 f.
11. 難民を Shanghai General Hospital（公済医院、1864年設立）その他の病院に入院させ治療を受けさせるには多額の費用がかかったため、支援委員会は各ハイムに外来患者（Ward Road ハイムの場合 1日平均100人）を扱う救急診療所と薬局を置いた。さらに移住者病院（最初は Washing Road ハイム、後に Ward Road ハイム）、隔離病棟（Chaufoong Road ハイム）、歯科病院、眼科病院、産科病棟（Ward Road ハイム、手術室と5床のベッドを備え、毎月平均8回の分娩が行われる）、レントゲン室（Chaufoong Road ハイムと Ward Road ハイム）および中央薬局（Kinchow Road ハイム、毎月2万上海ドル相当の薬を調剤し配付する）を設立した。

### 参 考 文 献

- Felix Grünberger: ‚Soziologisch-psychologische Studie über die Flüchtlinge in Hongkew (1948)‘. In „Zwischenwelt“. (18) 2001. S. 18-25.
- Felix Gruenberger: ‚The Jewish Refugees in Shanghai‘. In „Jewish Social Studies“. (12) 1950. S. 329-348.
- David Kranzler: ‚Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945‘. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976).
- Rena Krasono: ‚Strangers Always. A Jewish Family in Wartime Shanghai‘. Berkeley, California (Pacific View Press) 1992.
- James R. Ross: ‚Escape to Shanghai. A Jewish Community in China‘. New York (The Free Press) 1994.
- Siegfried Englert: ‚Sechs dürfen unter einem Gebetsschal beten. Zur Geschichte der Juden in Shanghai 1937-1945‘. In „Shanghai. Stadt über dem Meer“. Hrsg. v. Folker Reichert / Siegfried Englert. Heidelberg 1996. S. 109-122.
- 丸山直起：『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』、2005年、法政大学出版局。
- 阿部吉雄：「上海のユダヤ人難民社会の医師」、『言語文化論究』（25）2010年、九州大学大学院言語文化研究院、169～174頁。
- 阿部吉雄：「上海のユダヤ人難民社会の医療」、『言語科学』（45）2010年、九州大学大学院言語文化研究院、85～95頁。

本研究は JSPS 科研費24520806の助成を受けたものです。